

ルソー、フジタ、写真家アジェのパリ

ポーラ美術館（箱根・仙石原） 2016.09.10～2017.03.03



20世紀以降、世界各地に生まれた郊外の風景と、その風景を見つめる美意識は、まさにこの時代の「パリの境界線上」で構成されたものである。

本展覧会の〈みどころ〉は、「境界線への視線」に焦点を当てパリを愛した「ルソー」と「フジタ」の二人画家、写真家「アジェ」の作品の展示である。

「01」パリ郊外の「詩情」 三人の芸術家は市街地ではなく郊外へと視線を向けて活躍をした。

「02」絵画と写真 「ルソー」と「アジェ」は、共に現実を写しながら現実を超える世界を表現したとして、若い芸術家たちに大きな影響を与えた。

「03」普通の芸術家ではない型破りな三人は、独学の精神から学究的芸術とは異なる型破りな芸術的ア

プローチを生み出した。

「アンリー・ルソー」(1844～1910)は、仕事の余暇にパリ郊外の美に悦びを見出した日曜画家で、通称「ル・ドゥアニエ」(税関吏)として知られている。

《シャラントン＝ル＝ポン》 1905～10年頃 油彩・カンヴァス 上図

画伯は、セーヌ河を往来する川船の取り締りを業とし、河岸の風景は日常眺めていた光景そのもので、この緑豊かな郊外の町の風景を題材とし、両岸に電線、美しい細い欄干のある鉄製の立派な橋が架かるのどかな風景を描いている。

「レオナルド・フジタ」(藤田嗣治) (1886～1968)

《自画像》 1929年 水彩・墨、絹本

数多くの日本人画家が芸術の都「パリ」を目指したが、彼ほど成功をおさめて世界的名声を博した者はいない。

画伯は生涯で数多くの自画像を制作したが、裁縫道具を揃えてボタン付けをしている針仕事姿はこの一点しか知られていない。晩年まで自分や妻の服、カーテンやベッドカバーまで手掛け、好みの作品へと演出したとされている。

1958年秋から翌年の春にかけては、パリを舞台にして様々な仕事に従事する子供たちの姿を数多く描いて、“パリへのオマージュを込めた集大成”として完成させている。

「ウジェーヌ・アジェ」(1857～1927)は、近代写真の父と言われている。

